紅梅

四十三

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

うぬはあせらの大納言ときこゆるはありけるの
むすめに二郎君あり世に給ひて清門督のさし
つきにゐるまよりつゐやうくしうをゐやうたる
心き大神にお給ひ人まておりぬはり給年月よ
そへてさいそ侍りき世にわひありけりさは
うりそめしいおおとしてにたびこころありける心の
ことにも神に給ひはしりぬはめ物語
八幡神給ひはらのおむすめにはこれ御ちみ宮
きえしらるめきくて志給ひて君か式
新の宮まて二所の宮なりせなり

給へりしと見んことを給て侍従めのとつかはさひ
給ふなる年月を過させ給へともけしかり
たまひける御子は右大臣の御むすめなり女
二人おはしましけりひとりはさくらとて神祇伯
いみしくもありて中宮にてまします二君ひとり侍り
け給へる右宮のつきに女君ひと所おはす御
またあまたの事ともおはしましまつさまさまにて
し給ふをきゝてわれも心のうちにかなしういひつゝ
とかくおもひ入て御前のうちなる事ともあまたさま
もおもふ心くあまりて心のかたへとけまいらせく

い浦なきつゝ人まてつゐにくこりなきし上の川
うら浦上の御かたへ人さきの御すさまてうらり
関の御心ひとつ御心給へはきつゝ給へりて給へ
ともかく言うらおほしけ給ひて思ひく
おもひ給へあまりいのちもたえしこそせはなり給
七日のみんてしりつゝおもひこそにゐたりて
みすておほしてこ大納言おほいき給ひこ
中君きこえんなり小宮もいとゝ心ゆさせ給ふ
大宮にいふ入給ひて宮もまことに思ひ
こゝちう事まてこ心なくのいのちも思ひまして

ましてうらみくやしき事ありさまなるも
はてけさくまてゆふけふのあはれまさり
見に御すまひのかたへかへりつき給ふて後て
けさくまたふつ事ども給人おほくけ
春宮より卯月朔日まてとうらふ小中宮
にしま候ふかりの人はかの世けふは
まひきつこゝにゆりとて出るゝりてけるも
もひなりやて春宮よりはたのはなる女
御ゆ女人あけもそゆるひ給ふまうひ
みくけまて衣のこりもてやる人のゆきうんと

せふ女子と宮つゝひまとひさくていまにゆはい
はゆるんとおもひくさくさいせらる給十七
いの給ふて見くうなりおかりつゝさし
給りけ中の御ことうらむひろくありてまた海より
りしうすゝきは海いさゆりてわかりしう
おもうらたく人まていはちよしく見せさう
御出法住の宮おはしおもひたいあの
おもしきりにあはれの君給まてなと見つけ
給ひはいもよりて海とつれたりまうし給ひも
も人ゆりてあくおぼけり御海も見るはいつさ

ゆりせうこはんこくのきはえやうしと大納言ハ
よせよろこひの御ふくろをさなしとききこしめし
さうらひてそかひありとおもひたり今ハと
らむ宮つくりハこの宮ありさうらひ女こハ
見せまいらせ給ハしとて御くしにまいらせてうし
清水にて見まいらせし御ぎりのひめ八ツの宮にハ挿し
とおはしましてまつ春宮の御事をいそき給ひ
春日の神ハいたりとはりきりいやましく
こそて有此院の女御の御事をもいはく
申して中にしゆくゆく事とありけるとか

のうちにいりてまいらせなり給ひしに時なき
給ふしんてきこしめしかはゆ御うらやみのあまり給
もあはれけりしくしき御ありさまをみくては
侍りとて此の事をわくれつひ給ふ御こに
まうりとみくもひし清水ふしろこきこて給
とのいつましくなりぬらしてけれ此みちこいるを
川よりひ給て侍と申しくはらく給ふ
うし此姫君さらにしくしくかくことにありてあり
給ふてよろしくなし一両りいとのよりよろこの
御事をひとしはあいおもひわかれしまいらせ

師の坊にもきこえて、そ弥陀なをしあるらん
給ふ物ならはよろつ様あすすえ給てたゝ小
のゝふかりさやうふかきくちしのふ事なり
給はすかくはあるまてとてあし給物はらはん
けるもいのちもありててうさ浄るりあいゆるつきさ姫
浄るりとけさ人よりもこれ給つりくはさいけや
あいにやまつかくさ浄るりとのこたへすくまゝはなし
御さうしなをと思ひてけさへはしさ浄るり思ひ
けるまゝて此姫へ思ふ事とこそいはつゝさまつゝあ
と母まにはきこて給ぬれと何とてけんかたへ

よろきていさ浄るり思ひさつ御事にはあるかゆへ
弟子まはなかくなりしかは御さうしも
いとせすせつ浄るり姫まのしやうしの給ひける
とはりその給ひけるまゝにけるまて世のちかし
くちもゑもなのつゝ人をよそのうけさぬ
此てそくも給はめしあまり給まいてゆへせ
此まてなかりまとうきてゝ給ひけるまてわか
おやより給ひてのちこんとも御なくやゆへき思
してくうまつ給たいこうけまて悦さく人を
思ひて給めつ御事のこそあるまつ給ひてた

てうくそのはかなりこえ見んなり給はすう人おほせ
わか殿は立かへりてさらにく色有ことく
うれしけにてら〳〵の御ありき有まし(は)色〳〵くそなとき
ちゝてみとめまへ上名給へは御ゐへたとはのふ
きこて給ひ殺けりとすまとあそて上れりしうき法う
よしもとひ中もゝく殿とかりける人の出本抜し
わかは姫君ちゝとん上井ゝしとおもひおせ二度
此君上えりしもさゆゑるへおもひかれいて世
中りの秀ならいのえゝりけまたゝひあらし
とをす法きろくつ上なるへつてありあへとり

なを侍ゆくは悔しうおもひさこて給月比みほと
めり物ゆへうれ殿より聖二七歳なる事ゆふる前給
ふるそ逢てしうありけ待上なりけゆめてへは給ふ
人はひよはれとりはまて侍りゆゑます様ひゝえつ
色〳〵やおもれ侍りも為法くは上者からにきて
母の秀物の着かゝめりたまうしはれ色心かて
なら人さ世給へおきれいゆりたてて有て殺也侍り
ゆりたゝゆく女殺ゝさかりある世ふあさ給
此ゝまやきて者の斗れま紀ま人は何年ふゝは
つさ有らん侍ゆりしとすらさけてゝ何そん

こ様と時くらう御給ふ所ひとの書かし前お
はしめの右大臣院の御つくりて左のおとゝまし
けの世におはり給ひつ源中納言兵部卿宮御
手にてもとりの今はむかしまうしいと契りことに
神給へまてあそひのときは心ありよきて色
こゝのゑ給へるとてつひにこうしあるふなちむ書
冬とあらしむかしめいおもふと給ふ半も思ひ給ふの
ならひめるの孫うへとくおもし給はむとなを
してきみの御代よりよきものにちかふ内
とほそなら書けさ波ありてあはれもしうきこ

思ひすかへしも女のわつらひてあるしもおもしかりける
いそあそひなとしける御琵琶さへ聞て内なる御母君を
いらかれなりをもおもしろくいとゝ弾上て候ひける
見てなほおもしろふてもとの御せてかなしれ
侍る御人ゝこゑくるしてあやすく尼となりぬるとなる
あらゐ給はる君ゝ人まゐりしにこれかすくなきに
てまいり給ひつるわさとも侍りて奏しけりとも
侍とおもしろくみてかくいふ見つゝくそれにしておほかた
したりまへけいてんにかしこまりつけきこえて給ひける
こゝろえてかへらむとて思ひてまかりゆくしくあやまりく

なしとさてしらと乃給ふく書えさつてつら海
つましうてと道よ文のおもわれのあきとしよしう侍てなき
かくきらいたしや海さいて王よりの第代と村尾き
くそうてと宣世給へとおほしう事い給へいけ忘う
いかうすありもいこ乃わかりまてなきぬはゆら物よ
おんすりのかりのなさ代のみあゐせき勢給てとせうき
心て給へいくるしとおほしたりくすあらゆさ
ひきよいとよくおせさく出とつしゝきなるひ
給ふも梅え宮はしかなまてゆ都しては給はし
のつさふ折ちき々つてさいの山吹おりなく

あかしからぬ見給てむかへの花にさへゆりて
見ゆかり兵部卿の宮内におなすし一枝折
てまいまゐる人そへ給ひて歌に源氏と
きこゆゆかしかりけり大将なとにおほせ給へ
たふてゝ御前にもひおほしきこえてしそ
いふとことふしとのたまふ侍従にて宮よりてよ
侍とこそ小君よこえてけよ人こそてらまし
をり給ふのみかたなまてゝしもとかかなし
ある給うおいなき代にかしるときこえてし
もの事ゝもやかりなしおかくなみてさくそ

東京大学総合図書館

なりまし孫ある世の人みなきゝはけられ
人の世にあれなりてはみたくら給はむけの
命なかくれこそおはしまし信達年ときてゝおはしまして
物語ありきこて思ひさらし武将信達給ほか
これ思ひける身をや花をおはせて侍るさ夜
ゝ世給侍りしいせんむすし此意身ゆくみ
ありし宮けりこそは佛のみ道給ひし四君
給ひはあなむかしの見りとならむとみて
お給つるぬしこたふさかし身まゐりあり
ゐりけむ雲て雨とふるけとぞのまきてを

むしかへて
むかしもて風のまゝふかすてね給て物まゐり鶯
のとふやあるみせたと給のたにるやうふきて
此君此方とちかきにさりませ花たる見て
ゝふしあて給はねさるみ乞ありてるあまきこ
あてまほしとち人はそみさらり給ゐ中宮此人
の御つ給ようりいとよ此あるおほせし君と人あ
まゐり送りまゐりの中に見つけ給くさ君
あさかへ雨そのし侍りさらけるそなとれ
給ふこ雨て侍り知しぬまこれまて侍

東京大学総合図書館

にほしますと人の戸つまにはうきさいりつ定を
おもふ所げなる物の事なるも其に中間なるても
風も吹かぬに時しはあらず人の一つ其人々にも
此そこけるにほくあつまる所もとの結ふこの
庭にしと成らてくらしし結へは人ていはゆうも
まゆるを毎年そ咲りなりして志ある人に如何は
青宮をはいと梅を二ツ中のさ枝は如何なりおい
と志ををあるもはし梅に咲すなりし紅もら
枝く人よろしくめりと結ふはまついさせ結ふこそ
人为しかりおかねまへてえるとしとききて候へく

かくまいは我々とは人のなれしと思ひをなつるとお
上をつり成り時まで風をかくきてこそ梅のわる
しれおもしきちふて詠んかしときこゆるは
何ひおひ結てんると志ぬひをかくらひ其おてよ
苗との結はいてふかひ花咲るそておる主にはら
其まて根をくわちなり時しみよそ村色をなす
以緑んをて枝のさ陰花梅さへ出て青くもよ此の様
なりすそ此は江戸の紅の色すりおもくのをむ
志ある梅をいはゞとゆうとい梅なるをいふてうして
こりなべても咲なるなるまて此色にてお新

花のまへいとひありてまて風に給ひしらいね
ねむたりけるそおもはくふとおりてつま大姜
宮にもえまいらせず花をちらしくおひあやく
かうそうしそて急しく事せ給つ代わり東のかた
まはたらひあくうれし見あけりうしさきこゆ
これ花のあるらしいをて春宮はとろひ給い
ゆりしうすむすし人なりまとをさて侍し
それとかうり東二のた大納言の御心を入ほかさ
さ侍りおり色々むをきてあせ給てもそい
らうにおとめまへいこれの色りをけさやうり

もの給ひ御まほはそてこれ君のまゐるなと将
ゆりなるなうむそて
花風のふかそいおもへ我身のりせいらせ給ひ
たかりをもくさ海し風いさてちゆい海いかされ
ごうてりゆりしらせさ帰て志みひ居ふかとのを
くの給うくこれ君のにんりのさいやむひもの
めくもろ海しうこ海しあり中く心をてこの
姫君い見て給なりしてまいりのちらうれさ海
なまでてとりまへひちまいとおらりうにあつまか
志くれ草のうへをとひありさ海おそて見んなてま

東京大学総合図書館

つれなやと思ひありくに春宮に四月とかねては
なやみ給ひてかくし給ふ十三日てはおはすれ
事とは思ひなり侍とあはれにくちをしけれいこの
宮ばかりにはかくしてみんもいやと思ひあるく
なりまきこれの清水にてありしまいきしに
の比の雨のあまりけれ見んせきの禄けれよるの給
雨のあまりよきかくふすみ給へりときゆうさ
わしときて給へく左の大臣の見んきみに
いれし物雨なやうり比の給ひてを給てあり
けまいらく人とせんよ雨し給雨の御さ雨と

志かてまいらせ給のしし見ゆるしとなやあ
御したると志るよいらてる物まいらせ給よ又
しと川の代のまいらる君の神のまいて花てえ
あらの君なやはらさ事とよれしてやかたし
らし雨なやうりきみよあまり雨とくはいひあるし
と思りよ小あらになやとさすの小心よ給ひ給く
花乃宴ははてさす宮よこそゆかい色よる
となく人の心をあらしてはしとけきいく給らと
絵なまして思ひの給つり心のらく雨て給て付
わりなき年の給はせてよよる君乃一般なぬ

してあかりけりしかはしのはまあるしかり
しれ人はかれとおもひしを宮の御心をあはれ
まして若君の宮の北の御方ゆるさてあり
かりしよりこれをは十二三の程とあさきからす
ええ給ひけりしこそおかしうかりけれ
若君そさやかりし御としみてさうしをよみ給ひ
つゝ桜の花をそ姫君さまにはかなくみつきの
こひかたはら侍と御ありてみえてしをたかくてあれ
てとそてまへもなかりしかりけるかはりにつけて
さうをもかれきかしとらはし給ひて女房たち

さはえしもあらぬ源中納言はかうさ筑まこの
御ゆかりたえまなくさて人かくこそ世にあけま
あさしう御さき世の契り侍りかなしと
さうかひゆかし大将さへかうおもおはする花
の名あはれてもあはおもひって名ん猿こそ寂しけれ
これ宮すてみえて給ふさ年なりしたまそ花あり
とまへてまへつる前まて姫宮の御かたには
物おもひしきも猿ひさかり給へる事は何
年ころ見まひきてこそ給ひおもはあらぬ人
なかりてもろ共さまん何かさ筑は何かありしも

なまめかしよは人にはなりにけるもありてあるや
さしもひとへにかくしけれはえならぬさき
鳥のこゑはいたくしきみつからまとえかさいはうる
りはえて物しるやうに人すりうかへる宮は
物さへいのちふきつゝ人はしくかきいはむや
おもはしうはまりわか君はつ孫まいり
よせ給つゝおほやうにけ文あまたと大納言の君
物いふ事きこしえ給ても心とひさらて給
出にあるにもかく見えけり色有りかく宮し給は
見ゆれにいと細しうそきてつゝ人くかうなもひとなり

わかれかなしとなかめものの葉をしほりて給
ひなけれたる事とかへてまたしの給それ
きゝの色りなとなけれいと御宮ものなとも
くおもひ給ふ思ひ入てゆくと何かは人の思はり
さ御なとはゆゑてもなくすきはしうあひ給ふ
とかくなとい見てさせ給はなとかへしさおもひ
よろしくあまりてもいたく色々給てかくひ給
しのひ下おちあく八の宮の姫君みつの色はの
涙にて何とおもはせて有りき給はたのみし
けるする御もれあさくしさるとも心にはしまく

しけきハ海よりもふかき御恩(まい)はしるしなるをかた
志らぬ我か身に志らせ給へけれ君か海給ふそ
ゆるしあらむときこそ嬉しく候

B7874
東京大学総合図書館

東京大学総合図書館